

障害者レクリエーションの成立史に関する一考察

—Avedon の『三国志』引用について—

中 川 一 彦・李 正 派*

A study on the Chinese historical precedents of therapeutic recreation

—On the quotation of Chinese "San Kuo Chih"
cited by Avedon, E.M.—

Kazuhiko NAKAGAWA and Cheng-pai LI*

In this study, the authors investigated into the quotations of Chinese "San Kuo Chih" cited by Avedon, E.M. in his book "Therapeutic Recreation Service, Prentice-Hall, Inc., 1974".

As a result of the preceding, the followings are dedicated;

1. Chinese "San Kuo Chih" cited by Avedon was not from original one as an Official History, he quoted it from a novel of "San Kuo Chih" being translated into English.
2. It is hard to say that Hua T'o engaged in a game of wei-chi during the operation in the novel was the historical precedent as recreative therapy or therapeutic recreation, because this was neither prescribed by Kuan Yu nor play "Go" for restoring physical conditions by Hua T'o.
3. It is hard to say that "The Sport of Five Animals" cited by Avedon is the historical precedent as therapeutic recreation, because which is a kind of medical gymnastics, called Dau Yin.

Key words : San Kuo Chih

Hua T'o

Dau Yin

The Sport of Five Animals

therapeutic recreation

I. はじめに

障害者レクリエーションが独立的なサービス分野を形成し始めたのは、1930年代の初め、より明確的に言って、第2次世界大戦の後、アメリカの連邦病院や州立病院において、「病院レクリエーション・ワーカー」とか、「医療レクリエーション・

ワーカー」とか、あるいは類似の名称で知られていた人々が、アメリカの各地で、大規模に雇用された頃であった。

1950年代から1960年代にかけて、これらのレクリエーション・スペシャリストは、増加の一途をたどり、1956年以降、therapeutic recreation という用語が、幅広く受け入れられるようになり、以来、今日におけるこの分野の専門書でも、この用語が定着しているのである。

* 東洋大学大学院博士課程

Toyo Univ., Doctor Course

therapeutic recreation とは、リハビリテーション効果を高めるために、種々の医学的方法をレクリエーションと連携した形で進めることと解することが出来る。そして、これが、社会教育又は福祉活動として展開される場合には、「障害者レクリエーション」と称して然るべきであると考えられるが、我が国では、まだ独立した専門分野を形成するには至っておらず、その専門講座をおいている大学もない。しかしながら、特殊教育関係団体や障害児ボーイスカウト団、社会福祉施設などを中心にして、セラピューティック・レクリエーションの実体が、既に幅広く存在していることは、その分野の関係者でなくとも熟知している事実であろう。

従って、障害者スポーツにおける場合と同様に、障害者レクリエーションも、その効果を高めるために、普及事業に必要とされる指導者の養成を急ぐとともに、早急に制度化の実現を図る必要があると考えられるのであるが、しかし、日本語の専門書²⁴⁾⁵⁾¹⁰⁾¹⁴⁾は大変少なく、指導者やボランティア達は、自主学習のみぎり、『看護技術』(1969)や『理学療法と作業療法』(1977)、そして『総合リハビリテーション』(1987)などに、特集のような形で出た断片的な学術論文や、1985年刊行の『戸山サンライズ情報』に出るエッセイ的な論文などを除けば、ほとんど洋書に頼らざるを得ないのである。

ところで、これらの洋書¹⁶⁾⁸⁾にみる障害者レクリエーションの発達史には、古代中国における実例が紹介されているが、それらは、中国の古典書から直接引用したものではなく、大衆向け出版物の英訳文献などに依拠したもののようである。

そこで、本論では、障害者レクリエーションの発達史に関する正しい認識の形成を図る目的で、Avedon E.M. 著『Therapeutic Recreation Service』(1974)にみる華佗の逸話と「五つの動物スポーツ」について、関連文献に照らし、考察を加えたので報告する。

II. Avedon の引用にみる華佗の逸話

華佗は、中国後漢時代 (A.D. 25—220) の名医で、別号を元化と称し、在世年代はつまびらかにされていないが、一説では、後漢の献帝時代には、既に100歳を越えていたと伝えられている。彼は、伝奇小説や田舎芝居の中にしばしば登場し、しか

も、この人にまつわる伝説には、奇病と怪奇療法のエピソードが多く、それ故に、神仙と呼ばれたり、神医と崇められたりしている人物である。

この華佗を、Avedon は、古代のセラピューティック・レクリエーションの実例として次の様に紹介しているのである^{1, p7)}。

防具を付けていない関羽の腕に矢が刺さり、その矢先には毒が塗ってあった。傷は深く、毒は骨まで浸透した。右腕は血の気を失い、腫れて使えなくなった。首領は、引退する気配もなく、また、傷も治りそうにないと見た組長達は、將軍を世話する立派な外科医を遠近隅なく探し始めた。ある日、手に黒い袋をぶら下げた男が現われた。彼は、華佗と名乗った。彼は、名高い英雄の負傷を聞き付けて、治療するためにやってきたのであったが、関羽が、腕が非常に痛むにもかかわらず、碁に打ち興じているのを見た。華佗は、腕の怪我を診て、“傷に悪い毒があり、それが、骨にまで回っている。すぐに傷を治療はしないと腕が使えなくなってしまうだろう。こうしよう。私の室に、輪の付いた柱を建てよう。その輪の中へ腕を入れて下さい。私は、見えないように、掛けぶとんであなたの頭を包みましょう。そして、外科用の小刀で、骨に届くまで患部を切り開きましょう。それから、毒をかき出しましょう。これが終わったら、ある方法で傷を手当てし、糸でそこを縫いましょう。しかし、あなたは、その治療の激しさにひるむだろうと思います。“関羽は、“それはたやすいことなのに、なぜ、柱や輪が要るんですか。”と笑いました。それから、消毒が施され、2・3杯のワインを煽った後、勇士は、その腕を手術のために差し出しました。そして、もう一方の手は、碁を打ち続けていました。とかくする中に、華佗は、小刀を準備し、若者に腕の下のたらいを持たせ、言いました。“切りますよ。動かないで。”それから、華佗は、予告した通りに手術を行い、近くにいた人々は、皆、その目を覆い、顔を青くしました。しかし、関羽は、碁を打ち続け、たった一杯のワインを飲むだけでした。傷がきれいにされ、縫い合わされ、包帯がまかれると、関羽は、笑いながら立ち上がり、“腕は、元通りに良くなって、痛みもない”言いました。“正に、すぐれた治療者、あなたは、驚くべき人だ。”

III. 『三国志』の関羽伝

上述の長い引用文の出典について、Avedonは、San Kuo Chih, Romance of the three Kingdoms, vol. 11, trans. C.H. Brewitt Taylor (Shanghai, 1929), 156—59と記しているが、あいにく、これを入手することは出来なかったが、これは、中国歴代王朝の編纂になる正史の一卷『三国志』など関連の書物に依拠したものであろう。

ところで、この正史の一卷『三国志』の中で、Avedonの引用に相当すると考えられる所は、以下の様に記されているのである。

羽嘗為流矢所中
貫其左臂
後創雖愈
每至陰雨 骨常疼痛
医日矢鏃有毒 毒入手臂
当破臂作創
刮骨去毒
然後此患乃除耳
羽便伸臂令医劈之
時羽適請將飲食相對
臂血流離 盈於盤器
而羽割炙引酒
言笑自若

これを読み下し文にすると次の様になる。

羽嘗って流れ矢の中る所と為り
其の左肘を貫きて
後に創は愈れりと雖も
陰雨に至る毎に、骨は常に疼痛す
医日く、矢鏃に毒ありて、毒骨に入る
当に肘を破りて創を作り
骨を刮りて毒を去くべし
然る後に此の患い乃ち除かれん
羽便ち肘を伸ばして医に之を劈かしむ
時に羽は適たま將を請きて飲食相對し
肘血流離して 盤器に盈つるも
而して羽は炙を割きて酒を引い
言笑自若たり

以上 Avedon の引用と原典の『三国志』を突き合わせてみると、明らかに、次の様な相違点を指摘することが出来るのである。

- ① 矢が刺ったのは右腕ではない。
- ② 医師は、華佗なる者であったというようには言明していない。
- ③ 医師が来たとき、関羽は、碁を打っていたなどとは書かれていない。
- ④ 医師が、輪付きの柱や目隠しなどの使用を提言したなどとは言及していない。
- ⑤ 手術の最中に、関羽は、もう一方の手で碁を打ち続けたとは述べていない。
- ⑥ 関羽は、独りで酒を飲んだのではなく、將を招いて酒を振る舞っていた。

『三国志』は、『史記』、『漢書』、そして『後漢書』と併せて『四史』と称される中国の正史であり、三国時代の黄初元年から太康元年 (A.D. 220—280) までの歴史が記されている。

著書の陳寿は、『晋書』本伝によると、「叙事を善くし、良史の才あり」とされ、清代の王鳴盛も、「記事翔実にして、曲筆を為さず」と評価している故¹²⁾、興味本位の脚色は、ほとんど無いと見て良いものと考えられる。

また、この『三国志』の魏書29巻、方技伝に出てくる華佗の伝記には、関羽の腕を治療したなどという記事は無く、関羽伝に言う「医」が、華佗であるという証拠は見つからなかった。

IV. 『三国志演義』にみる関羽伝

『三国志』は、魏書 (30巻)、蜀書 (15巻)、呉書 (20巻) から成り、西晋の陳寿の作であると伝えられ、後世の小説や戯曲に大きな影響を与え、古来、題材の宝庫として持て囃されてきた。従って、講談、伝奇小説、武勇伝、漫画本、戯曲、雑戯など、出版物や芸能界のあらゆる分野にわたって、『三国志』の物語を扱ったものは、数えようもないくらいに多い。

当然ながら、中国オペラのシナリオにおいても、三国志物語は重要なウエイトを占め、例えば、清朝初年の昇平署の作になる崑劇 (四川オペラ) 『鼎峙春秋』は、なんと200余幕にもわたる長芝居なのである。また、元朝の『三国志平話』は、後に、『三国志演義』と改められ、今日でも、大衆読者の多い一大ベストセラーであって、我が国でも、訳書が広く読まれている。

京劇 (北京オペラ) のシナリオは、『三国志演義』を改編したものであり、148幕もあると言われている。

前述、Avedon の引用は、この様な小説や劇本に依拠したものであろうと考えられるところである。

そして、これらの三国志物語に医師が登場するとすれば、例外なく「華佗」とされるのは、彼が、神医と崇められているところの、「華佗」の庶民偶像的な存在に所以するものであろうと考えられるのである。

物語の劇的効果を高めるためには、木工の名人は「左甚五郎」でなければならないのと同様に、医師は、華佗でなければ面白くないからであろう。

華佗伝に徴して、後漢の末年には、外科手術の術者が出現したのであろうけれども、占い師、祈禱師、呪い師、妖術師などに混じって、いいかげんな経験術を売り物にする治療師が横行していたことは、俗称用語の「赤脚医師」の存在に照らして疑いの無い所であろう。

神格化された「華佗」は別としても、その多くは、医師と称するには程遠く、術者と呼んでこそふさわしいのではないであろうか。

関羽の腕を治したのは、怪しげな「赤脚医師」の一人であったのかも知れず、それ故に、『三国志』の関羽伝の中では、単に、「医」と称して「華佗」とし言明しなかったのであろう。

もう一度、Avedon の引用を考察すると、その内容は、『三国志演義』の叙述とほぼ一致していることが分かるのである。

『三国志演義』の第75回、「関雲長刮骨療毒」（関雲長骨を刮って毒を療す）には、関羽（雲長は、その字）の腕の手術に関する一部始終が、面白おかしく、細々と挿絵入りで書かれており、そこには、正史に書かれていない囲碁が登場しているのである。（図1）

この一幕は、特に、関羽の豪傑振りを際立たせるために、敢えて脚色したものであると見るべきではないであろうか。正史では、事実につき過ぎるのを嫌って、特に、省略したという可能性も無いわけでは無いが、仮に、そうであったとしても、華佗の処方に基づいて、計画的に囲碁が実施されたものでなければ、レクリエーティブ・セラピーとは言えないであろうし、また、手術後における機能回復訓練の目的で、関羽が、意図的に、囲碁を行ったのであれば、セラピューティック・レクリエーションとも言えないであろう。

ちなみに、正史並びに図1に照らし、この『三国志演義』や Avedon の引用にある、傷ついた腕

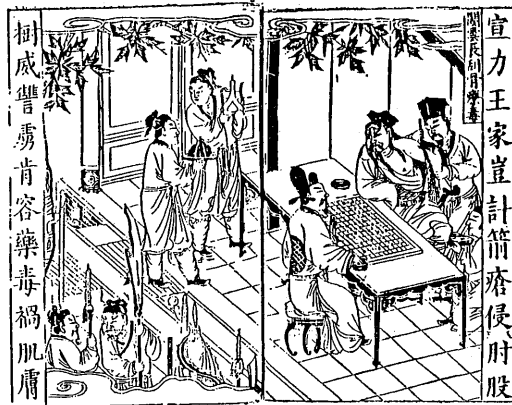


図1 碁盤に向かって華佗の手術を受ける関羽
（文献10より）

が右側であるという記述も誤りであり、流れ矢は、関羽の左肘を貫いたのである。

V. Avedon の引用にみる「五つの動物スポーツ」について

古代中国におけるセラピューティック・レクリエーションの第2例として、Avedon は、華佗の「五つの動物スポーツ」（The Sport of Five Animals）を挙げ、次の様に述べている^{1, p7.8}。

人体は活動を必要とするが、しかし、極度の活動は避けなければならない。活動中、食物は消化され、血液は動脈を介して循環し、それ故に病気にならない。だからこそ、古代の不死の人々は、吸気作用を営んでいる間、冬眠中の熊の様に時を過し、鼻の様に辺りを見回し、腰や四肢を伸ばしたり縮めたりして、老化を防ぐために、関節や膈門を動かしたのである。私は、虎、雄鹿、熊、猿、そして鳥の五つの動物スポーツと言う技を持ち、吸気作用に合わせれば、病気はいやされ、足の動きのために良いのである。具合が悪いと思うときにはいつでも、立って、これらの動物の一つの動きをまねると良いし、汗をかいて、気分が良くなったら、からだ中に米の粉をつければ、ほどなく、非常に動き易く、良く感じ、食欲も進むでしょう。

この部分の出典について、Avedon は、“Biography of Hua T'o” in History of the Later Han, cited by E.H. Hume, The Chinese Way in

Medicine (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1940), pp 171—72から引用したものであると記している。

これは、中国医術に関する英文書の中に引用されている『後漢書』における華佗伝を、Avedonが、再引用したものである。

この原典は、『後漢書』の列伝83巻、方術伝であるが、Avedonの引用に相当すると考えられる所は、以下の様に記されているのである。

佗語普曰。「人體欲得労働、但不當使極耳。動揺則穀氣得鎖、血脉流通、病不得生、譬猶戸枢、終不朽也。是以古之仙者為導引之事、熊經鸕願、引換腎體、動諸關節、以求難老。吾有一術、名五禽之戲。一日虎、二日鹿、三日熊、四日猿、五日鳥。亦以除疾、兼利蹄足、以當導引。體有不快、起作一禽之戲、怡而汗出、因以著粉、身體輕便而欲食。」普施行之、年九十餘、耳目聰明、齒牙完堅。

これを読み下し文にすると次の様になる。

佗、(呉)普に語りて曰く、人体は勤勞を得んと欲するも、但し当に極まらしむべからざるのみ。動揺すれば穀氣消するを得て、血脉流通し、病は生ずるを得ず。譬えば戸枢の朽ちざる如く是れなり。是れ以って古えの仙者は、導引の事を為す。熊頸鸕願、腰体を引軛して、諸關節を動かし、以って老い難きを求む。吾に一術ありて、五禽之戲と名づけ、一は日く虎、二は日く鹿、三は日く熊、四は日く猿、五は日く鳥、亦以って疾を除き、並びに蹄足に利し、依って導引に当たる。体中快からざれば、起きて一禽の戲を作す。沾濤として汗出れば、困りて上に粉を着け、身体輕便にして、腹中食を欲す。(呉)普、これを施行して、年九十余なるも、耳目聰明にして、齒牙完健なり。

『三国志』の魏書29巻、方術伝にもこの記事が載っているが、内容は全く同じであるから、明らかに、『後漢書』から転載したものであり、Avedonの引用文と比較して、両者は、大筋において一致していることが分かる。

「五つの動物スポーツ」は、原典では、「五禽之戲」となっている。しかし、『後漢書』にしても、『三国志』にしても、「熊頸鸕願」という言葉を除けば、「五つの動物スポーツ」に関する具体的な内容の説明は見られないのである。

ちなみに、「熊頸(ゆうけい)」とは、熊の首はずんぐりしており、図体が大きくて、動作はのろいけれども、木登りがうまくて枝にぶら下がることが出来ることを言い、「鸕願(ぎこ)」とは、鸕(ふくろう)がキョロキョロと四方を見回して、動作が非常にすばしこいことを意味している故、前者は、「熊の首吊り」つまり懸垂運動を、後者は、「梟の首振り」つまり回転運動を、今流に言えば、ぶら下がり健康法やストレッチングなど、何んらかの方法で背筋を伸ばす運動と首の捻転の様な運動を指しているものと考えられるのである。

いずれにしても、華佗の紹介した五禽之戲は、後の、太極拳、八段錦、十二段錦などの健康法として広く民間に広まり、我が国においても、種々の医療体操法として親しまれているものなのである。

華佗自身が、「以當導引」つまり導引に相当するものと言っているように、この種の導引術は、古来、道教の道士達が好んで修行したもので、「吐故納新」つまり故きを吐きて新しきを納むと言うように、深呼吸に重点をおいた「吐納術」つまり呼吸体操であるから、今日に言うスポーツ(運動競技)という程のものではなく、ましてや、障害者のためのセラピューティック・レクリエーションとは、趣旨を異にするものであったと考えられるのである。

それ故、Avedonの紹介した「五つの動物スポーツ」をセラピューティック・レクリエーションと見なすならば、それは、上位概念としての「レクリエーション」の定義を難しくするだけであろう。

Avedonは、中国古典を引用するに当って、英訳資料に頼らざるを得なかったのであろうが、資料吟味の上で慎重さを欠いていたものと思われするのである。

VI. まとめ

Avedonの『Therapeutic Recreation Service』を元に、障害者レクリエーションの発達史、殊に、古代中国におけるセラピューティック・レクリエーションの実例として紹介されている後漢時代の華佗の逸話と「五つの動物スポーツ」について考察を加え、以下のことを明らかにすることが出来た。

① Avedonの引用文の出典にはSan Kuo Chihとあるが、これは、正史としての『三国志』

ではなく、関羽の腕の手術場面の囲碁の登場など、その内容からして、小説としての『三国志演義』の英訳本からのものであることが明らかになった。

② そして、手術場面における囲碁の存在は、医師華佗の処方に基づき、計画的に囲碁が処方されたものでなければ、レクリエーティブ・セラピーとは言えないであろうし、あるいは、手術後の機能回復訓練の目的で、関羽が、意図的に、それを行ったのでなければ、セラピューティック・レクリエーションとも位置づけられないものと考えられ、この一件は、ただ単に、関羽の豪傑振りを誇張するために、敢えて挿入されたものであると考えられた。

③ 「五つの動物スポーツ」の引用・紹介については、『後漢書』や『三国志』に依拠する限り、それは功夫 (Kong-Fu) の一ジャンルである導引術であるから、スポーツ発達史上の一例とみなすことは出来たとしても、セラピューティック・レクリエーションの実例とはしがたいものと考えられた。

障害者スポーツや障害者レクリエーションは、欧米から取り入れた学問である関係上、ともすれば、英文書籍に過大な権威性を認めがちになるかも知れない。しかし、英文文献における東洋古典の引用には、世界一難しいと言われる漢字の壁が存在するので、狭いトンネル・ビジョンを通して、歪んだ認識をする場合もあるであろう。従って、この分野での邦書が極めて少ない今日、特に、その原典を吟味してみる必要性を痛感させられた。

参考文献

- 1) Avedon E.M.: Therapeutic Recreation Service, Prentice Hall, 1974
- 2) Haun P., (今井毅訳): レクリエーション: その医学的見解, 美巧社, 1976
- 3) 石原保秀: 皇漢医学及導引の史的考察, 鳳鳴堂書店, 1933
- 4) 鹿島清五郎: レクリエーション療法の理論と実際, メディカルフレンド社, 1963
- 5) 小林八郎: レクリエーション療法, 日本医事新報, 1956
- 6) Krans R.: Therapeutic Recreation Service, W. B. Saunders, 1978
- 7) 中川一彦: 柏倉松蔵の医療体操に対する考え方に関する研究, 筑波大学体育科学系紀要, 第7巻, 201-207, 1984
- 8) O'Morrow G.S.: Therapeutic Recreation, Reston, 1980
- 9) 大黒貞勝: 導引, エンタプライズ, 1980
- 10) Pomeroy J., (城戸正明訳): 身体障害児とレクリエーション, 医歯薬出版, 1974
- 11) 李甲孚: 後漢的神医華佗, 海外学人, 181号, 1987
- 12) 三国志, 中華書局版, 1963
- 13) 鈴木秀雄: セラピューティックレクリエーションの基礎的理解, スペシャルオリンピック, 第1巻, 第2号, 16-24, 1982
- 14) 鈴木秀雄: セラピューティックレクリエーション, 講談社, 1985
- 15) 立間祥介: 三国志演義 (下), 平凡社, 1974
- 16) 卓大宏, (杉充胤訳): 中国体育療法, 柏書房, 1977